

江納作然言に 家康卿之語河國に持領之
為涉礼穴山後と此同道に滅涉上落之由に
聞旨舟涉宿子ハ明智日向古所は宿ふに依舟に
涉馳走能あまりや看るに用意の次第に
可に能き免子に見舞ふに夏夜用意此
はこれ後乃おさうの中は門に入に能は
ひく風子つ連急き白ひ吹来に
涉舟舟に能以くおに腹立り料理乃關
直子舟成に能は此様子ハ 家康卿之語ハ

能る言と此腹立に能くは堀文右郎所へ涉宿
に依舟にこそ時高の吉丸此口を右の通と
うけ給に信長記も大變坊而 家康卿に
宿子被仰舟にと此能は此宿乃様子ハ二通り
此心得可に能は日向古面目能あひとく本
具はうお能基を舟用意のとり者以下
ありへおあも中は是悪にわい安土中へ
ちしかりとお聞の中事

一 家康卿之同年五月十五日安去舟ありて此

注進事

一 日向守、注進出く青羽築碁守秀吉為三月下旬より安藝此毛利輝元、注指向以處より備中へ國、輝元兵おのほら城素崩しこれより急月たう憐へ押よを其威風うやおと流き旗と宅隊人よあう人事とと事終り依る城と信より一命をたきけ彼勢と合まへ高松へ押寄せ城主志水長左衛門立籠いと歳重とも終く取かみい處より

彼城々人おんふして一人より可攻破事
難得と見及はくハ水と免にと倭定仕より
注進有る事

一 以上名先利おより後詰可有之とて堤を又
より流きより上より心をか事陣屋城かけを
堤の外よりハやく城おらんくひさかき
とゆり水も過きたまりに、居筑碁守所より
注進以為加勢中川瀬兵衛高山右近長岡典一郎
只今此三齋の事也津の國塩川黨備中へ

陣用意可仕と在付國にさし居られ間日向
幸但馬より因幡に入彼國より毛利輝元
分國伯州雲州に集程亂入す事也各取不可
有油断の早に舟波に在歸陣用意仕と云
しと申立下中と在付惟任日向す内返り子ハ
畏入候急度陣用意仕申立可申候於内吉
左右者輝元領分孫五に亂入先格の様子
可申上候と領掌仕安土と在立丹波長城
龜山に入申候事

一 於安土、家康卿に馳走せし所、所山崎の瑞
物と云調其上所能梅若大吏、在付舟にまゐ
り幸若大吏と申す中、幸若八郎九郎と云
候の所、家康卿に感被承け候、ハ幸若今
一番仕候と樂座に御役と在立候事、舞ハ
和田さうゆり越まひ中、右より出候、依
とく、金子百兩帷子五十疋、此の梅若と云
此音物も同前あり、名去梅若能、不本末、取
重るど、いづれも、仕候事、願と云、成候、制と

後より宿に帰便を立はと事

二 備中表松子毛利一家大軍と卒し及詰子孫出作と詰子孫所より花脚到来

事

一 信長公所分別より輝元幸此所に出來以上此次より討果と思合豫所馬廻百六七十騎能為稱より所父子以上は被知信長公之幸能事宿也城より分度は二條此所取に所入に成事

一 家康卿と京まきく事同道可中の大坂堀生次る、所後より穴山成を所百連能其連より大坂堀に見物より山下に家康公所時宜ふは一人に添に成に根と此理に知に所より長谷川お休と案内者、所討に滅に大坂所見物被成より所堀に所見物より此におに信長公所切腹堀に注進と事右より長谷川お休家康卿此所供に濱松より被系に

伊賀越下伊勢上に出立感は其次才の
後古古之流は樵本よりうまは産は水尋
可成事

一 羽柴統番守天下不成中後長谷川お作
とは 家康卿より進出は羽柴統番守
石原越前より十二万石持領佐惟澄
五郎左衛門成は果は成る事

一 堀久左郎と京都より備中へ出立は
松子吉次次より毛利と退治は成は馬

と出立は事可成は統番守能見及久左郎と
可中合は事也一左右次第は京都より直下
所馬越可成はと信長公所切符は松子
美着はと信長公所切符は松子
中來は成は事也一味同心あり後誠
國は十八万石持領あり丹羽五郎左衛門成
は果は成は事也羽柴統番守は中八右は久左郎
成は事也

一 惟任日向守長城丹波龜山に入る事否陣

用言おと日につくとおぼえ中作五月廿八
日予愛宕へ社参あり西の坊を宿に定連歌
興りやおぼえ中は是を信長記に在る間
不入儀もく歩坐くを毛名去次亦不同
無くためり如此書付中作中

時より下志新五月哉 日向守

水よまはふ庭の浦川 山 西の坊

花につる流乃末とせきめく 紹 巳

此道より百韻事抄よりて龜山へ下り事

一 古閑様天下に在作る後は發向此次才江間台
紹巳へ歩意りは妙程能くありたる候り
し處惟任乃悪人とのみし作中不似合候と
く此志かり被承くを江州三井寺に山林
作る羅居し後歩教免みくを在出に

一 日向守謀殺し松子家中能死此五人に云す
せし程いと信長記にハ此程いと能く云人者
明智左馬助彌平次事也同次郎左衛門孫田
傳五齋孫内藏助溝尾少兵衛日向守

心中筆跡所談合々々々若若同心を以て
牛王此裏より起請と好尚注の書を則人質
と云々の免有々々語定お流中作と信長記子
右此坐以

一 明智友家中に被居居以つる加州肥前屋に於
右置以武者幸以) 注仰有住山崎長門守
後吉閑齋と中以大坂兩度所陣の時も有々
通もく此座以此人の難談又林龜の助堂
中て関白殿所切腹此後福島大夫殿に

注右出作之後大和此下總屋に被居居以
此後下総屋々々々相果中以是を日向寺殿に
此屋以つる正龍寺此合戦より痛手おい味
方此死人と引く事合戦を以て以て後
京乃ハ幡と系たんお坊主にかたこれ命た
此中り中におお人此者々々関白様と此
右付注右置以有々山崎長門守林龜之介
此兩人難談々々度々此以有々不人死と談合
と被不此中々々

一 山崎長門守林龜之助度々難後より八日向
 方後佐助より及中國に出陣以明日より
 未だなくかくとく五月廿九日之銃炮乃玉薬
 之外長持等と龜山を廿九日に荷物百餘并
 西園に指出し是を三日先能事や

一 六月廿日申刻計に家中の物よりらせ
 身中半より及京都森お飛所より上様
 所後よりハ中國への陣用意出来たる人数の
 たるは是れ家中此馬とも括子可成能事後

作留早々人数は召連孫上と様とお礼所より
 飛所お来る間にお心得らる是れ自是武者
 立たる事むはと是中出別龜山北東の紫
 燈之はおかく時をともや酉乃刻に能成作自
 身系廻人数三段より傷人此人数何れも可
 有る武齋孫内飛助に能佐守をくハ内々
 乃は人数の法より一万三子とて是れ症と
 是及中は是れ法中上より

一 日向方後等並より南に馬と乗出一傷人と

一町半計隔く聲彌平次とよしのと勢五
 人此者ともに談合をせき子孫の方を
 我前へ来く人そく弥平次史の系はゆよ人
 名石寄此外阿し旦に一人もせし一日向
 ち後をしやうきよりおと交皮をたぐ
 きせをより居ふとる存胸中かろや上様
 か介しに所を立を承く候を各はなれ也我身
 三子石の時候は廿五万石持領仕は時人一番
 持不中し候は大名元此者ともよしのと處り

松岐阜三月三日能登向大名高家此茶し
 面目多し一攻身を信濃の上は証訪り
 乃此世門かん又此度 家康卿所上治の
 と記安去ししく所宿は信守の處に能走乃
 以是油断しは様子は志よりを承候り西園
 陣と被行は條敷再三不及の上を強しは
 秀身とゆし可及なれ又はししと事と案を
 るし右し三ヶ條は遺恨の次身同出度事
 にもや可成世間ういてん人のあし一度

吾は一人一度たとうと云ふはよくよくは
 居たり先後此れの中の一程知ると下の
 思出をするは是は先秀を存切に吾無
 同心し名奉能奇は一人我入臆切くと思出す
 覺悟や吾はつふと云ふは忘るは殊に
 進歩く中程字を降一人は狗子思召立候
 ども大志の地知る我一人一人と云ふ
 ま一人の心は候なりまてや吾人此者不
 信候と上と思召候事全に吾用ひと云ふ

上や心も溝尾内助と初とて目出度
 此事思召被立の明日よりして上様と可幸
 何事案し内候もやと別り所談合
 一言も不入事、以高月を群の外程
 行くは程と云ふ上自是五里此道と云ふ
 みては程は如く、明をよハ奉能と云ふと
 佛死可程候事此心は本能を代ふる前子
 此のうつ名程候事此より二条此所討案し
 此程は候心と云ふ候もやとて、是後談合